

## 放射線業務従事者における健康診断受診からの経過年数による食習慣の違い

西出朱美<sup>1\*</sup>、工藤伸一<sup>\*1</sup>、吉本恵子<sup>\*1</sup>、古田裕繁<sup>\*1</sup>、三枝新<sup>\*1</sup>

1) 公益財団法人放射線影響協会放射線疫学調査センター

【背景・目的】疾病予防に、健康診断（以下、健診）の定期的な受診が果たす役割は大きい。健診受診することにより現在の健康状態を認識するだけでなく、必要に応じて生活習慣等を含めた疾病予防のための適切なアドバイスを受けることができる。放射線影響協会では放射線業務従事者における低線量被ばくの健康リスクを評価するためにコホート調査を行っており、調査対象者となることに同意を得たコホートに対し生活習慣等アンケート調査を実施し健診受診及び罹病と関連が深いと考えられる食習慣等の情報を取得した。本研究は、男性の放射線業務従事者（退職者含む）において、最後に健診を受けた日からの経過年数（以下、経過年数）による食習慣の違いについて検討することを目的とした。

【方法】放射線業務従事者を対象に2015年度より実施した自記式生活習慣等アンケート調査票に設けた健診受診及び食習慣の質問への有効回答、かつ必要な個人情報（年齢、性別等）が2017年2月10日までに得られた男性の放射線業務従事者を対象とした。健診受診の質問内容は、「最後に健診を受けた日（1年以内・1-3年以内・3-5年以内・5-10年以内・11年以上）」である。この情報を用い、解析対象者を最後に健診を受けた日からの経過年数別に5群に分けた。食習慣の質問内容は、「バランスの良い食事（とっている・とっていない）、野菜（よく食べる・普通・ほとんど食べない；以下同様）、塩加減の濃い料理、甘味の強い料理、油っこい料理」の5項目である。これら5項目の食習慣について、健康に良くない食習慣の割合を経過年数群ごとに求め、群間で健康に良くない食習慣を持つ者の割合に違いがあるか、年齢を調整した上でCochran-Mantel-Haenszel testを用い検討した。

【結果】解析対象者は、33,438人であり、平均年齢は56.5歳（S.D.±14.0歳）（経過年数別：1年以内、55.1歳；1-3年以内、66.4歳；3-5年以内、67.4歳；5-10年以内、68.6歳；11年以上、70.7歳）であった。食習慣では、5項目で健康に良くない食習慣の割合に群間の差がみられ（ $p<0.001$ ）、この割合は経過年数が長い群で高かった。

【考察】経過年数が短いほど健康に良くない食習慣の割合が低いことから、健診の定期的な受診は、健康に良い食習慣を形成させる、何かしらの良い影響を受診者に与えている可能性が示された。さらに、経過年数が長い者の属性を検証し、健診受診を推進する活動を通し定期的な受診を上昇させることにより、健康に良くない食習慣が低減する可能性があると考えられる。

※ 本調査は原子力規制委員会原子力規制庁の委託業務として実施した。